

吉良竜夫先生の河内松原の家の思い出

大阪市立大学名誉教授 山 倉 拓 夫

はじめに

吉良竜夫（本名・吉良龍夫）先生がお亡くなりになってから、既に3カ月余が過ぎた。先生についての思い出を書きたいのであるが、今でも大津市のご自宅でお元気にお住まいのような気がして、筆が進まない。先生のおられないことが現実とは思え難いのである。これは、私の吉良先生についての主な記憶が、先生が大阪市立大学（市大）を62歳定年の2年前に辞職された、1981年で終わっているからなのであろうか。大阪を去られた1981年以後も機会あるたびにお会いし、矍鑠（かくしゃく）とした先生、病気で手術された時の先生、老い屈まれても決して老い痴れられることのなかった先生、奥様に先立たれた時の先生、脳梗塞の病に倒れられて後のご療養中の先生など、先生の生涯を考える上での重要なお姿に接することができていたはずなのに。私の気持ちを私自身が説明できない不思議な心理状態のままではあるが、ここでは、先生からご指導頂いた7年間（1974年10月～1981年9月）で、私が接することができた生活者としての先生を、私なりの表現で書かせて頂こうと思う。

先生は1949年7月から1981年9月までの31年間を、植物生態学担当の市大理学部教授として活躍された。従って、私の記憶に留める先生の姿は、先生の市大在任期間中に限っても、先生のごく一部を映したものにすぎない。以下の文章では敬語

表現をするべき個所でも、敬語を用いずに記すことをお許し頂きたい。

最後の本籍地となった松原市岡

先生の自宅は大阪府松原市岡の住宅街にあった。この住宅街は近鉄南大阪線河内松原駅を下車し、徒歩20～30分の位置にある。住宅街になる以前は水田や畑であったそうで、私が先生宅を初めて伺いした1974年当時でも、住宅街の周辺には広く田畑が残っていた。先生と泰子夫人は、以前の住居であった大阪市住吉区刈田の大阪市職員住宅を後にされ、この地に移られた。転居年月を市大事務局職員課に問い合わせたが、通勤届の書類が残っておらず、確認できなかった。1968年には本籍地を京都から岡地区の住宅街に移されているが、庭の樹木の大きさなどを考えると、それよりかなり以前に転居があったのだと思う。以後、滋賀県大津市に住民票が移されても、本籍地の変更はなかった。

住宅街の近くに、河内大塚山古墳（墳丘長335m、被葬者不明、雄略天皇陵とする伝承あり）や反正天皇を主祭神とする柴籬（しばがき）神社がある。また、住宅街には土師姓を名のる邸宅（旧土師酒店など）もあった。これらの遺構、神社縁起、邸宅などは、岡地区を含む松原市域が、渡来人によって開発されたという古代史の学説を首肯させる。岡地区は歴史的に古くから開発の進んだ、

住みやすい所であったようだ。先生は歴史の教えるところに従い、住み良い地を求めて転居され、生涯の本籍地とされたのであろうか。

岡 3 丁目12番12号地と用水路沿いの花木

松原市岡 3 丁目12番12号地がより詳しい先生の住所であった。この地番の敷地の形は不整形であったが、三方が公道に接して開けた、日当たりの良い土地であった。住宅地に地目変更される前は、田畑であったせいか、道路と敷地の間に段差はなかった。調べれば分かることであるが、敷地面積は70坪くらいだったのではないかと思う（図1）。敷地の角には児童公園があり（図1のA）、敷地に接した道路の向こうに用水路（図1のB）が流れていて、雨上がりには心地よい水音がし、カエルが鳴いた。道路と水路に挟まれた帯状の空き地に、先生は挿し木で増やしたムクゲとキョウチクトウの苗を植えた（図1のC）。ムクゲの挿し穂は後で述べる先生宅の生け垣から、キョウチクトウの挿し穂は市大旧教養部キャンパスの旧生物学

実験棟水槽横の植栽木から、それぞれ採穂した。この二つの花木は大きく育ち、現在も見ることができる（図1のC）。

先生が愛好されたムクゲとキョウチクトウは、挿し木の際の挿し床が異なる。ムクゲの挿し床には鹿沼土などを用いるが、キョウチクトウのそれには水を用いる方が良い（水挿し）。キョウチクトウの挿し木では、挿し穂下端部分の樹皮に縦に切れ目を入れ、切れ目を入れた樹皮を茎から剥がすが、剥がした樹皮は挿し穂全体からは切り離さずにそのまま残し、挿し穂下端部を水の入ったビーカーなどの透明容器に入れておく。こうするだけで、キョウチクトウは発根剤などの手を借りることなく容易に発根する。挿し木の時期もムクゲとは異なり梅雨期ではなく、8月の方が良い。先生は、ムクゲとキョウチクトウの性質の違いを教えるために自分の経験を話されたのであるが、先生が亡くなり、先生宅とその生け垣、および旧市大生物学実験棟と往時の植栽木を見ることができなくなった今では、空き地に植えられた二種の花木は先生と移りゆく市大の懐かしい遺品である。

趣味のガーデニング

先生は色々なことに興味を示されていたので、登山、旅行、写真、カタツムリの標本収集など、趣味も沢山あったと思う。しかし、50歳代後半の日々の忙しい暮らしが、それらのすべてを許したか否かは定かではない。限られた時間の合間を縫って取り組まれた趣味に、日本の自生植物を主材料とするガーデニングがあった。三方が開けた、日当たりの良い角地に居を構えられたことは既に述べたが、その背景にはガーデニングへの計画的意図があったと思う。敷地で隣家との境界側に家屋と納戸が建ち、それ以外の部分が広い前庭となっていた。家屋と庭は、ほぼ同程度の面積のように

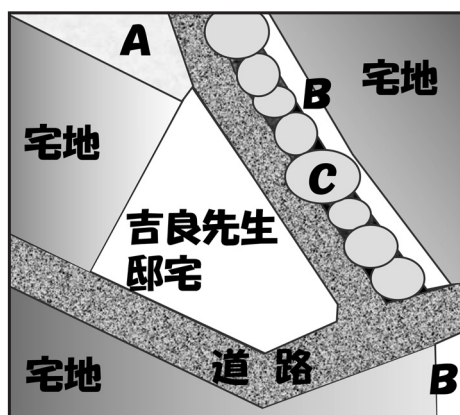


図1. 吉良竜夫先生が住まれた松原市岡 3 丁目12番12号地の模式図。図中で、宅地と記した部分は他家の邸宅で占められていた。

見えた。

庭で、まず目を惹いたのはムクゲの生け垣で、夏には薄藤色と白の花で彩られた。それまでの私はムクゲの生け垣を知らなかったので、初めて出会った時にはびっくりすると共に、何と洒落た生垣だろうと思った。生垣の中ほどあたりに門が開いていて、セメント舗装された幅1mくらい、長さ数mの小道が動線となって家屋玄関へと続いていた。舗装された小道の傍らには、植えられたもの、自然生えのものを含め、いろいろな植物が育っていて、植物名を思い出すのに頭を悩ませ、花や実、育ち具合を鑑賞しながら歩くと、短い距離ながら数10分を要した。小道の路傍を含め、庭で土が出ている部分には、多くの植物が植えられていた。

胸高直径30cm程の一本のケヤキが庭の中程にあり、ドイ（タイ語で山の意）・チンタノン（意味不明、マレー語とタイ語の混合名なら“愛する”の意か？）と称された根元の盛り土の小山にはエビネが咲いた。東洋ランの栽培は先生の趣味の一つで、地植えのものにはエビネの他に、サイハイラン、シュンランがあった。玄関横には出入りの工務店特製の数段から成る鉢棚があり、カンラン、ハウサイラン、シナシュンラン、フウラン、セッコク、ウチョウランなどの鉢植えが、種類ごとに異なるランの光要求度および鉢の中のランの育ち具合に基づく先生固有の鉢配置理論に従って、整然と並べられていた。サギソウ、トキソウの鉢は鉢棚ではなく、日の良く当たる花台の上にあった。冬に加温の必要な種類は、裏庭の温室または家の中に、適宜収容された。キンラン、ギンランを見たこともあったが、鉢植えでは栽培が難しく、庭に居着くことは無かったようだ。これらのランには、恩師の並河功先生（京都帝国大学農学部農学科園芸学担当教授）から譲り受けられたセッコク（現在、滋賀県立大浜端悦治氏管理）も含まれて

いた。鉢植えの植物として、シダやカタヒバ（東洋ラン栽培の趣味に倦んだ人が最後に辿り着く植物）の珍品種などのシブイ植物もあり、市大赴任前の農学部農学科園芸学研究室の職場で、助手（京都帝国大学）、助手（京都帝国大学）、助教授（京都大学）時代に培われたと思われる、園芸植物栽培についての趣味の広さが窺われた。

先ほど述べたドイ・チンタノン山の周りには、エビネの他に、イカリソウ（白花）、ミスミソウ（白花）が植えられていて、ケヤキの葉が疎らな春には青、紫、赤、ピンク、黄、白の花々が咲いた。夏にはケヤキの葉が茂り、その日陰がドイ・チンタノン山を覆った。山から離れた、日当たりの良い所には、夏に開花する草本植物が植えられていて、ハマユウ、ユウスゲ、ギボウシが印象的であった。他の植物を思い出せないのが残念でない。ユウスゲの蕾は先生の好きな食材で、そのバター炒めを肴にビールを飲み、美味しい夕食のご相伴にあずかったことが懐かしい。赤花のキョウチクトウは先生の好きな花ではあったが、庭に入れるには大きすぎたためか、あるいは原産地が日本ではないためか、先ほど述べた空き地に植えられた。秋には、紫と白のシュウメイギクが咲き乱れた。白花のシュウメイギクは粉川昭平先生宅からの株分けの品種であったそうである。シュウメイギクの季節が終わると、ツワブキが咲いた。ツワブキは東北から九州に至る数カ所で採集されていて、南のものほど花期が遅かったようである。ツワブキが咲き進むにつれて、ドイ・チンタノン山のケヤキの紅葉が進み、夕陽を浴びたケヤキの庭は黄色に染まった。ケヤキも先生の好きな植物で、市大理学部キャンパス前の、大きく育ったケヤキの植え込みには、吉良先生の趣味が反映されている。また、先生が市大辞職後の市大入試の生物学の問題で、ケヤキの生物季節の一文が用いられたことがあったが、これも先生の無言の意思の

なせる業であったのかも知れない。ケヤキの葉が黄色から褐色に変じ、落葉が始まる。その頃には鉢棚のカンランの上品な香りが微かに庭に漂いはじめ、やって来る静かな冬の訪れを知らせる。

冬の庭にも目を見張るものがあった。それはケヤキとムクゲの、特にケヤキの落ち葉の扱い方にあった。通常、掃いた落ち葉は庭から持ち去るか焼くかすることが多い。これには落ち葉に着いた宿主固有の病菌や害虫はもちろん、土の中にも潜むモンパ菌やヨトウムシなど、宿主非特異的な病虫害から植物を守る意義がある。田畑で収穫物の残骸をその場に放置しないのはそのためだ。先生の落ち葉の扱いは常識に反して、落葉をムクゲとケヤキの周りに戻したのである。森の落ち葉が木々にとって栄養資源であることは、生態学の養分循環の教えるところである。この教えに従えば、落ち葉は持ち去るのではなく、その場に残す方が合理的である。先生は、これを実践された。ただし、根元に落葉を掃き集めるのではなく、根元からかなり離れた場所に、数本の同心円に沿って落葉を配置したのである。ケヤキの周りにはエビネなどが植えて込んであるので、それらの新芽が萌えるのを妨げないようにすると、落葉の同心円は微妙に歪むことになった。幾何学的なニュートンリングとは異なり、所々で揺れ動く、見た目にも美しい、芸術的な落ち葉の縞が出来上がった。ムクゲの生垣に沿っては、数列のムクゲ落ち葉の縞が出来上がった。忙しい先生に、よくもこんなことをする時間があったものと驚いたが、陽が降り注いで明るい、冬の落ち葉の庭も、とても美しかった。

先生のガーデニングの材料に松原市のシンボルの木（マツ）と花（バラ）はなかった。また、現在ガーデニングで広く使われるハーブ類もなかった。庭に植えられた西洋由来の唯一の花は、花の少ない早春に咲くスイセン2品種（芳香性のスノー

ドロップ、黄花ラッパ咲きのフォーチュン）のみで、この花は夫人が好まれたようだ。先生の庭は、西洋由来のガーデニングの考え方に従って作られたと思われるのに、植物資材はほとんどが日本産のものであった。著名な日本庭園では、庭の所有者ではなく、庭師の人生観や芸術的感覚が問われてきた。市民も取り組める西洋由来のガーデニングにおいては、そこに現出した庭とは、庭作りに関わった庭の持ち主の知性と教養の反映に他ならない。ガーデニングの考え方はもちろん、先生の知性と教養も、西洋にその多くを負っている。とはいえ、出来上がった庭は、伝統的日本庭園とは異なるが、極めて日本的であった。先生の属された“いわゆる今西グループ”では、如何に西洋の物まねであるか否かが、しばしば問われたという。その意味で、私は傑出した生態学者による、先駆的の日本式ガーデニングを見たのだと思う。細かな記録をしていなかったことが悔やまれるが、当時の私は生態学の分野で身を立て得るか否かの瀬戸際に立っていた。先生の斬新なガーデニングを記録する余裕は無かった。

書斎

植物を観賞しながら門から玄関への動線をたどり、玄関前のインターフォンを押すと、扉が開き、きれいな洋服に笑顔の泰子夫人の明るい声と、暖地性のランの鉢、外国の街角での入手物と思しき珍しい掛け物や置物が、訪問者を出迎えた。タイやマレーシアなどの東南アジアの国々で入手されたことが、明らかに分かるものもあったが、そうではないものも多かった。玄関上り口は板の間で、その右側に洗面所があり、更にその横の扉はトイレへと続いていて、外から病菌を家に持ち込まない工夫と、訪問者への配慮が感じられた。

玄関の上り口の左横の扉は開け放たれていて、

木製の数珠玉を糸でつないだ暖簾が掛かり、絨毯敷きの書斎へと直接続いていた。書斎の広さは8畳くらいであったと思う。玄関と書斎を仕切る部分の壁には本棚が置かれ、先生の著書や専門書が詰まっていた。本棚を背に、大きな机と椅子が置かれ、その横に愛用のIBM社製電動タイプライターがあった。机に座って左側は大きなガラス窓となっていて、ご自慢の庭が良く見えた。庭の中心のケヤキは、夏には日射を遮り、冬には裸の梢を通して柔らかな光を部屋に送り込んだ。この窓の上の棧には、出入りの工務店特製の細長い飾り棚が作りつけられていて、七宝焼の小さな壺、中国式天秤の分銅、フクロウの小さな置物などが整然と美しく並べられていた。

机の前には居心地の良い小型ソファとテーブルが置かれ、テーブルの上にはオウムガイの貝殻、旅行写真のアルバム、旅行先で採集した外国の植物の押し花などが置かれていた。ソファの後ろは板敷きの広い廊下となっていて、この廊下は後で述べる、居間、台所へ通じていた。廊下には、カンボジアで採集したシンビジウム、イリオモテランなど、寒さに弱いタイプのランの鉢植えが置かれていた。空調にはエアコン、オイルヒーターを用いた。

その配置が書斎の何処であったか、明瞭には思いつけないものに、工務店特製のカタツムリの標本棚（筆筒状）がある。見たこともないカタツムリの殻が、棚の格段に納められた標本箱にぎっしり詰まっていた。特に記憶に鮮やかなものとして、マレーシア国パソー産の標本がある。それは緑色をしていて、先生にとっても珍品であったようだ。この標本を見てから、先生への私の旅行土産の一つはカタツムリになった。

上に述べた書斎で、先生は日曜日を除いて（当時は週6日勤務）、毎日深更まで自分の論文と科学随筆を書き、学生や知人から預かった論文に朱

筆を入れ、時には彼らの和文論文を英文論文へと書き換え、加えて学術雑誌編集委員会や出版社などから依頼された論文の校閲と査読を行った。論文の校閲は丁寧で、私の書いた日本語文章の場合は、あらゆるところに主筆が入り、真っ赤な原稿用紙が返ってきた。先生の字は丁寧で美しく、直された原稿を清書している間に、先生の字が手本となり、私の書く文字の字体も先生の字体と似た丸い字体となってしまった。英文の文章には、私の書いた文章の片鱗も残らず、まったく新しい文章となって返ってきた。私の書いたものは、英文にほど遠かったのである。

日曜日には、先生は平日にやり終えることができなかった仕事を書斎で継続すると共に、書斎にある物品の手入れと整理をされた。仕事に厭きると、気晴らしに庭に降り、植物の手入れと草引きに勤しんだ。このため庭でスズメノカタビラやナズナのような雑草を見ることは無かった。時には邸宅敷地外の空き地も草引きの対象となった。植えこんだムクゲとキョウチクトウを守るためであった。草引きの苦労は、さぞ大変であったろうと思う。書斎も庭も、先生が触るものはどんなものでも、絶えず手入れと整理がされていて、美しかった。

居間とダイニングルーム

書斎の奥が掘りごたつとテレビのある居間兼ダイニングルームで、広さは10畳くらいであったと思う。ここで、研究室全員で、おいしい料理を頂いたことが何回もあった。先生は長く結核の病気に苦しまれたせいか、食事には用心深かったし、栄養学を学び厚生省に勤務されたことのある夫人の調理技術と食事への配慮も並みではなかった。ただし、力の要る果物のジュース作りでは、スクイージーを用いて、先生自らが果汁を絞られた。

好物は肉、エビ、貝柱、白身魚、スモークサーモン、果物などで、食事時の飲酒は稀、飲んでも少量のワインであった。ただ、就寝直前まで頭を使う日々であったせいか、寝つきが悪く、不眠に悩まされていたため、睡眠薬代わりの寝酒として、コップ一杯の焼酎（サントリー樹氷）にスクイザーで絞ったレモンやスダチの果汁を加え、それを一気に飲みすることがあった。これらの食材は近鉄百貨店、松原市の公設市場（旧松南市場、旧岡センター）、旧土師酒店などで入手されたようだ。タバコはチェリーを愛煙した。食事には気をつけていたはずなのに、好物も影響してか、1976年のある晩、先生は片方の足（右足か左足かは記憶不明）の親指に痛風を発症した。真夜中にタクシーで近所の医院に行く際、歩行困難となった先生の杖代わりにお供し、二人で先生よりは年若い医師にひどく説教された事件が懐かしい（当時私は先生の自宅の数件隣で借家住まいした）。食事を生み出す台所は、居間に続いていた。台所については、そこへ入った機会は無かったので、その様子を記すことはできない。

通勤

先生の平常時の通勤経路および利用交通機関は近鉄バス（岡3丁目バス停～近鉄河内松原駅）、近鉄南大阪線（河内松原駅～天王寺駅）、および国鉄阪和線（天王寺駅～杉本町駅）であった（所要時間約50分）。学内での仕事や出張などで疲労が重なった際には、自宅から職場までタクシーを利用した。朝一の講義が無くなっていたため、10時から12時頃に出勤することが多かった。仕事を終える時間は、通常は午後6時から午後7時頃であったが、教授会、各種委員会、団交のあった日

は、しばしば深夜に及んだ。午後7時以後の帰宅ではタクシーを利用した。

晴れの日で、気分が良く、時間にゆとりのある土曜日には、先生はしばしば河内松原駅から自宅までの帰路を歩いた。そのルートは路地から路地を複雑に縫うもので、うっかり歩くとすぐに道に迷い、袋小路に陥る、スリリングなものだった。奈良県の市町村でもそのような路地が多いから、路地が複雑なのは地域の開発の歴史の古さと関係があるのであろう。時に先生の帰宅時間と私のそれとが重なることがあり、先生の帰宅のお伴をすることが何回かあった。道すがら、見ることのできる神社、寺、邸宅、農地、栽培されている植物などをタネにして、松原市を含む河内の歴史（農業の先進地帯だったことなど）と風土について教えて下さった。また、有機塩素系農薬の使用や都市の大気汚染が問題となっていた時代で、先生も植物に及ぼす大気汚染の影響をウキクサやアサガオで調べ、その報告をされていた。アサガオの葉に残るオキシダント発生の傷跡がどのようなものであるかを学んだのは、この通勤ルートにおいてであった。先生はこの通勤ルートで色々なことを観察し、考えておられたのだ。

おわりに

細かいことを長々と書いてしまった。先生の思い出はつきない。職場での先生のことも書くべきと思うが、このことについてはご存知の方が多いので、省略する。私の記憶の中では、今でも先生は泰子夫人と共に、日々の暮らしに勤しまれている。とは言え、客観的には先生の死を動かすことはできない。お元気だった先生を偲びつつ、先生のご冥福をお祈り致します。